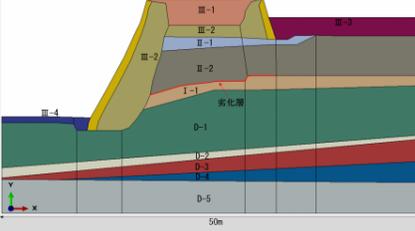
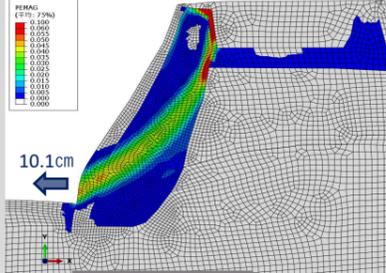
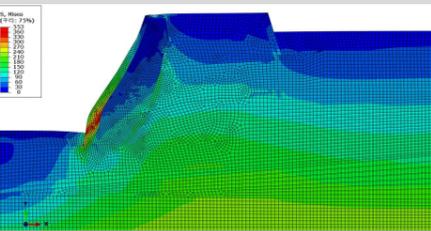
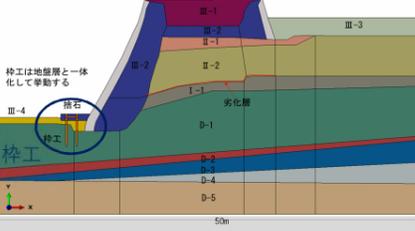
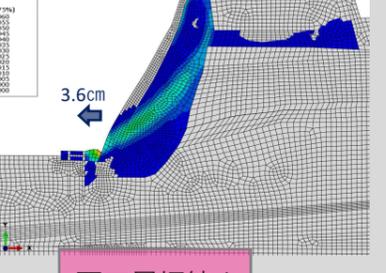
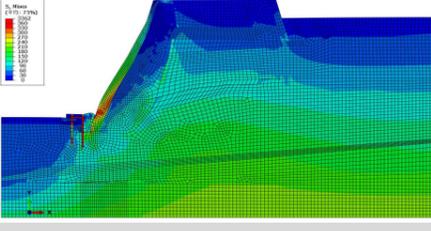
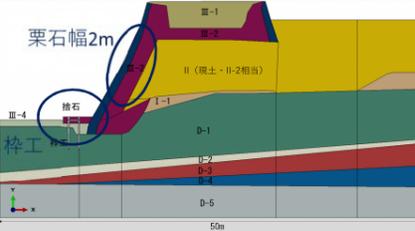
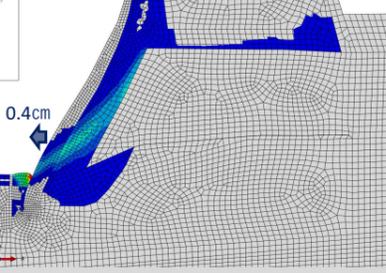
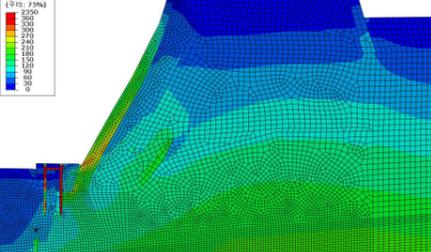
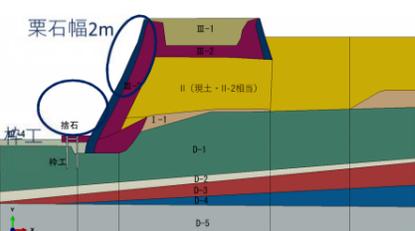
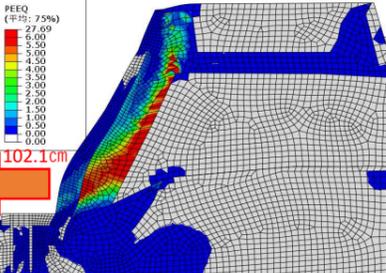
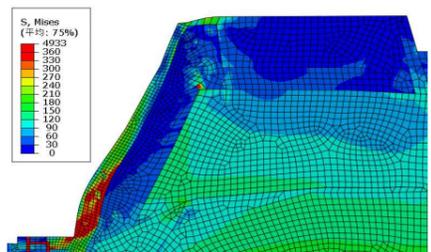


ケース	概要	モデル図	塑性ひずみ	せん断応力	所見
1-1	【常時】静的解析 孕み出す前の状況				<ul style="list-style-type: none"> <li>・築石層と栗石層に変位量と塑性ひずみが大きい部分がありすべり面を形成している</li> <li>・せん断応力は築石に集中する</li> <li>・変形量は10.1cmとなっており、変形形状は現状とよく似通っている</li> <li>・幅の広い栗石層が不安定となることが分かった</li> </ul>
1-2	【常時】静的解析 枠工を追加				<ul style="list-style-type: none"> <li>・枠工の追加により変形量が減少している (10.1cm→3.6cm <b>64%改善</b>)</li> <li>・足元を押さえる枠工は効果が高い</li> </ul>
2-1	【常時】静的解析 栗石幅を2mに縮めた修復案				<ul style="list-style-type: none"> <li>・栗石層を2mに縮めることにより変形量がさらに減少する (3.6cm→0.4cm <b>89%改善</b>)</li> <li>・栗石幅の縮小は効果が高い</li> <li>・静的解析では地震時の栗石の挙動評価できないため、動的解析で照査する必要がある</li> </ul>
3-1	【地震時】動的解析 ケース2-1に地震波を入力 (東南海地震を想定)				<ul style="list-style-type: none"> <li>・静的解析と同様の変形形状となった</li> <li>・南海トラフ地震規模の地震発生時の変形量は相当大きいものと想定され、<b>崩壊も懸念される</b></li> <li>・櫓台内部は総栗状態であっても変形はごく小さい</li> </ul>